２０２５／１２／０７　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：約束を守られる主②：『ひとりのみどりご』
聖書箇所：イザヤ書９章１－７節

この朝見ていきたいのは、イザヤ書９：１－７のみことばです。先週から私たちはクリスマスシリーズとして約束を守られる主について考え始めました。毎年この時期になると、多くの人によって祝われる救い主イエス・キリストの誕生、聞き慣れた賛美歌は街中にも流れ、教会でも馬小屋や羊飼いなど親しみのあるストーリーが語られ、ある意味であまりにもなじみのある出来事であるからこそ、そのすばらしさが私たちのうちで薄れてしまっています。でも本来であれば、この出来事ほど常に私たちに最高の希望をもたらしてくれるものはありません。偶然ではなく遥か昔から約束されていたインマヌエル、そう呼ばれるひとりの男の子が生まれたというその知らせほど大きな喜びをもたらしてくれるものはありません。先週メッセージの準備をしている時、一つのドキュメンタリー動画を見つけました。内容は初めての陣痛から赤ちゃんが生まれるまでの瞬間を描いた物語でした。妊娠４０週目となり、入院したお母さんは無事に生まれてきてほしいという楽しみと緊張でいっぱいの中、少しずつ陣痛が強まって、長時間の激しい痛みを経験した後、生まれてきた我が子を見て、こう言っていました。「すごい」、「かわいい」と。つい数分前まで病室に満ちていた暗い苦しみはそこにはもうありませんでした。誕生とともに一瞬にしてうれしさだけがあふれ返っていたわけです。そしてこれはどんな赤ちゃんでも同じです。何か月も何か月も待ち続けてきた赤ちゃんが生まれたという知らせは、いつの時代も母親だけではなく父親にも、まわりの多くの人たちにも喜びをもたらしてくれるものでした。実際、私たちの教会でも先週また先月とふたりの子どもが無事に与えられましたが、ずっと私たちも祈り待っていたその知らせを聞いた時、皆にとって本当に感謝なことだったと思います。

改めて考えてみてください。何か月、何年の話ではありません。私たちの愛している救い主の誕生の約束は、実に最初創世紀の３章でなされ、その後も長い間繰り返し繰り返しさまざまな預言者を通してなされ続けてきました。ずっとずっと待ち続けてきたそんなお方が今から約２０００年前、約束されていたとおりにこの世にお生まれになったのです。この誕生の知らせは今、どれほどの喜びを私たちのうちにもたらしているでしょう。１２月は忙しくなります。でもそのような中で、この誕生の知らせは何か当たり前のものになっていないでしょうか。今でも変わらず私たちにうれしさを、喜びを、楽しみを、感謝を、希望をもたらしているでしょうか。Ｊ・Ｉ・パッカーという先生も著書の中でこんなことばを残しています。「最初のクリスマスのときに起こった出来事の内にこそ、キリスト教の啓示の最も深く、測り知れない真理があります。神が人となられたのです。……考えれば考えるほど、その偉大さに心が打たれます。この受肉という真理は、どんな空想話よりも驚くべきものなのです。」と。

☆ひとりのみどりごが生まれる

きょう私たちは先週のインマヌエルに続いて、同じイザヤ書の中からイエス様の誕生に関する神様の約束を見てみたいと思います。私たちが見る二つ目の約束は、「**ひとりのみどりごが……生まれる**」です。この約束は、当時の人だけではありません。今の私たちひとりひとりにとっても最高の喜びを、最高の希望をもたらしてくれるものでした。いったいどういうことなのかは、みことばから考えてみましょう。

<u>イザヤ９：１－７</u>

「:1　しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。:2　やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。:3　あなたはその国民

をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。:4 あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。:5 戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」

●希望の背景：民を取り巻いていた苦しみ

▸北王国イスラエル（別名：エフライム）と南王国ユダ

さて、これから内容を見ていくわけですけれども、その前に頭に入れておいてほしいことがあります。それはこの当時の状況です。預言者イザヤが活躍していたこの時代、イスラエルという国は大きく二つの国に分かれていました。サウル王様、ダビデ王様、ソロモン王様で一つだった国は、悲しいことにソロモンが死んだ後、北と南の二つに分かれました。北側にはイスラエルの十二部族のうち大部分の十部族が移り住み、そしてその国はそのままイスラエルとかエフライムという名で呼ばれました。南側は残りの二部族が移り住み、そのうちの最大の部族ユダにちなんで国全体がユダと呼ばれました。そしてこの二つの国は、どちらもが何の問題も起こさないすばらしい国だったのではありません。残念ながらどちらの国もひたすらに罪を愛し、神様に逆らって堕落した状態にありました。彼らは自分たちの主を自ら捨てて、偶像を拝み、聖なる神様のことを侮って、悪に悪を、悪に悪を、悪に悪を重ねていました。

そんな罪深い彼らに対して、神様はあることをなされます。聖く正しい神様はそんな悪を当然そのまま放置される方ではありません。それにふさわしいさばきを彼らの上に下そうとしていました。神様は彼らのまわりにいた強大な敵を用いて、国を攻めさせ、民を強制的に奴隷として、いた場所から連れ去ろうとしていたのです。実際に北王国のイスラエルはアッシリヤという国によって何度も攻撃を受け、捕囚を経験して崩壊することになります。南王国のユダも同じです。彼らも少し先の話ですが、圧倒的な力を持ったバビロンという国に攻められ、占領され捕囚を経験することになります。これが当時の状況でした。

なぜ私たちはいつもこうやって背景を考えるのでしょう。それは、神様が預言者イザヤを通して約束を語られた時、人々が神様を必死に求めていた状況ではなかったことを覚えるためです。神様は人々が救いを求めていたから与えたのではありません。国全体に悪がはびこっていました。まわりを見渡してみれば、偶像礼拝にあふれ、だれもまことの神様のことを求めようともしない、人々はかたくなに主に背を向けて遠く離れ、そんな彼らにはまさに主の厳しいさばきこそが当然の報いでした。

○『ひとりのみどりご』：希望をもたらす三つの約束

でもそのような最悪の状況の中にあって、救いは神様ご自身によって差し伸べられるのです。救いの約束、救いの希望というのは、どんな時も同じです。私たち自身のうちから始まるものではありません。救いというのは神様に逆らっている、それにいっさい値しない者に対して神様がただ恵みとあわれみによって、与えてくださる贈り物なのです。そんな贈り物が今回の箇所にもはっきりと描かれていました。神様のことを捨てて、神様の方に背を向けて、滅びへと向かっていたそんな絶望的な罪人に対して、希望をもたらしてくれる約束が三つ、ここに記されていました。どんな約束だったのか、どんな贈り物を神様は値しない者に与えようとしたのか、具体的に一つずつ見てみましょう。

１．光が与えられる　１－３節

まず神様の与えた一つ目の約束は、光が与えられるということです。やみの中を明るく照らす大きな光がいつかやって来る、それが神様の与える約束、贈り物でした。１－３節にこのように記されていまし

た。「**:1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。:2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。:3 あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。**」と。先ほども言いましたが、この当時、人々はやみの中を歩んでいました。考えてみてください。やみの中を歩んでいるというのは、実際どんな状態のことを言うのでしょう。聖書は、その様子をいろいろな形で描いていました。

たとえば人々の抱える霊的盲目さのことを言いました。でもこれは少し想像してみたらわかるかと思います。これまでに何度も経験したこともあるかもしれません。真夜中、目が覚めてトイレに行こうとした時、扉や机の角、床に落ちている何かに思いっきり足をぶつけてしまったこと、日中、光があれば、見えていれば何も考えずに避けているようなものでも、いっさい光のない真っ暗やみの中にあれば、何も見えなければ、私たちはいろいろなものに気づかずにつまずいてしまいます。やみというものと盲目さというものは結びついているのです。これは霊的状態においても同じです。やみの中を歩んでいた当時の人たちというのは、霊的な盲目さというものを抱えていました。霊的に見えていなかったのです。そのことはイザヤの中にも何度も言われています。たとえば神様が預言者イザヤを働きに召した時、こんなことばでその民のかたくなさを表していました。イザヤ６：９に民の様子を「**すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』**」と言われています。同じようなことがイザヤ４２：２０にもこんなふうに書いています。「**あなたは多くのことを見ながら、心に留めず、耳を開きながら、聞こうとしない。**」と。彼らは神様のことばを一度も耳にしなかったのではありません。それをいくら耳にしていても、自分のこととして理解することができませんでした。彼らは神様のみわざというものも一度も見なかったのではありません。それを何度も何度も目にしても、神様を素直に受け入れ、知ろうとはしませんでした。神様やそのみことばが遠く離れていたのではなく、確かに彼らのすぐそばにありました。しかし悲しいことに真っ暗やみの中を歩んでいた彼らには、その真理を見ることが、その真理に気づくことができなかったのです。

そしてこの悲しい現実というのは、何もこの当時の話だけではありません。昔も今も別に変わっていないのです。イエス・キリストを信じていない者は、今もなおやみの中を歩み、真理に対して盲目になっています。そのような人は聖書のことばを何度も何度もいろいろなところで耳にするかもしれません。十字架で成し遂げた救いというものも何度か聞いているかもしれません。でもそのすばらしさというものが暗やみの中にあって、いっさい見えないのです。いやむしろ盲目な人にとってはそれらは自分にとって関係のないもののように思えます。どれだけ良い知らせだと伝えられたとしても、その盲目な人にとっては、それを信じることはあまりにも愚かな行為にしか見えないのです。かつてパウロもＩコリント２：１４で「**生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。**」と述べていました。例外はいません。生まれながらの罪人のうちには、霊的な盲目さというものがありました。何も見えない、そんな真っ暗やみの中を歩み、神様から遠く離れてさまよっているのです。

やみの中を歩んでいる状態というのは、そういった霊的な盲目さだけではなく、ほかにも死やさばきというものも表していました。神様に逆らってやみの中を歩んでいるその罪人、見えずにそうやって歩んでいる罪人、そのような者の最後にはそれにふさわしい報いが待っているのです。神様はそういったご自分の下そうとしている厳しいさばきの様子をこんなことばで表現しました。イザヤ５：２４－２５「**:24 それゆえ、火の舌が刈り株を焼き尽くし、炎が枯れ草をなめ尽くすように、彼らの根は腐れ、その花も、ちりのように舞い上がる。彼らが万軍の【主】のみおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のみことばを侮ったからだ。:25 このゆえに、【主】の怒りが、その民に向かって燃え、これに御手を伸ばして打った。山々は震**

え、彼らのしかばねは、ちまたで、あくたのようになった。それでも、御怒りは去らず、なおも、御手は伸ばされている。」と書かれています。すさまじいさばきの日がやって来ることが言われていました。また３０節にはその日の様子が書かれています。「**その日、その民は海のとどろきのように、イスラエルにうなり声をあげる。地を見やると、見よ、やみと苦しみ。光さえ雨雲の中で暗くなる。**」と。それはやみの中を歩んでいるすべての罪人に待っているさばきでした。それは悲惨な状態でした。真理を悟ることもできずに、いのちである神様から離れてただ苦しみのさばきへと向かっていました。

そのような絶望的な真っ暗やみの中にあった時、そこに光が照らされるのです。この光というのは人々の心の内に喜びをもたらしてくれるものでした。９：３を見ると、「**あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。**」とあります。神様が与えられるその光というものは、それに値しない罪人のうちに大きな喜びをもたらしてくれるものでした。苦しみとさばきのみがふさわしい、そんな真っ暗な心に喜びを与え、喜びでもって明るく照らしてくれるようなものでした。そんなすばらしい光が与えられるという約束が、神様によって与えられたのです。でもその光は、どのようにして与えられるのでしょう。それは光として来られた救い主を通してでした。マタイの福音書４：１３－１６を見てください。４０日４０夜、イエス様は荒野で悪魔の試みを受けられました。その後のことばがこれです。そしてこのことばの後、イエス様は公の働きを始めていかれます。「**:13 そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。:14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、:15 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。:16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。**」」と。神様の約束は確かに成就しました。暗やみの中にいた罪人は光を見ることになりました。どのようにしてかと言うと、まことの光として世に来られた救い主イエス様を通してでした。イエス様はご自身のことを「**わたしは、世の光です**」（ヨハネ８：１２）と、はっきりと言われていました。「**わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。**」」と。やみの中、盲目だった者を照らして真理を見えるようにし、死とさばきがふさわしかったその者にいのちをもたらしてくれるお方、それが光であるイエス様でした。それこそが希望を与えてくれる神様からの贈り物だったのです。

２．自由が与えられる　４－５節

二つ目の約束は、自由が与えられるということです。重荷を取り除く自由がやって来る、それが神様の与える約束、贈り物でした。イザヤ９：４－５にこのように記されていました。「**:4 あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を、ミデヤンの日になされたように粉々に砕かれたからだ。:5 戦場ではいたすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。**」と。これを読んだ時、不思議に思ったかもしれません。預言者イザヤはここであなた――これ、神様のことですが――が、重荷のくびきを「**粉々に砕かれたからだ**」と口にしていました。これはまるで過去の出来事を言っているように思えます。もっと言うと、これまでに出てきていた動詞の多くも、たとえば１節の最後の「**光栄を受けた**」にしても、２節に出てきていた「**大きな光を見た**」にしろ、「**光が照った**」にしてもすべて過去形で訳されていました。これを読むだけだと、何かイザヤが先の話をしているのではなくて、もうすでに起こった出来事に触れているかのように感じるかもしれません。でもそうではありません。別に覚えなくてもいいですが、これらの動詞には、預言的完了形という動詞の形が使われました。預言的完了形というのは、ある出来事が将来必ず起こるから、まるでそれがもうすでに起こったかのように過去形で表現する方法でした。ですからここで「**照った**」とか、「**見た**」とか「**砕かれた**」と過去形で訳されているのは正しい訳です。なぜ正しいかと言うと、イザヤはここで昔の話をしていたのではなく、神様がご自分の民の上に重くのしかかっているその苦しみを取り除かれる日が必ず将来やって来ると、強い確信を持って預言していたのです。

４節で「**重荷のくびき**」、「**肩のむち**」、「**杖**」と、彼らが受けていた苦しみを表現する三つの道具が出てきていました。この三つに共通するのは、どれも相手を虐げたり、自分のものとして思いのままに従わせる時に使う道具だということです。ちょっと想像してみてください。当時、荷物を運ぶために飼われていた牛は、２頭を横に並べられて木でできた重たいくびきを首につながれ、車を引かされていました。その首につけられたくびきというのはあまりにも重たくて、弱ってしまった牛の中にはその重さに耐えきれずに、そのまま地面に押しつぶされてしまうようなこともありました。家畜の持ち主は、そのような牛をむちや杖で打ったりしていたのです。くびきというものは、非常な苦しみをもたらすものでした。民の上には、そんな重たいくびきが乗っていました。彼らはまわりの国、特にアッシリヤなどによって何度も何度も攻められ、そしてこの先さらなる苦しみや痛みを味わうことになります。彼らは自分たちのことを押しつぶすような外から迫る巨大な圧力に対して、おびえ苦しんでいたのです。民の上には、そのような重り、敵の恐怖が乗っかっていました。

そもそもなぜ彼らの上にはそんな重荷が乗っていたのでしょう。それは彼ら自身の罪が原因でした。そのような重たいくびき、重荷というのは彼ら自身が神様に逆らった罪が原因でした。外側だけではありません。彼らのうちにあるけがれた罪というものが多くの苦難を、何よりも厳しいさばきというものを自分たちの上にもたらしました。彼らが抱えていた巨大な罪が彼らのことを押しつぶしていたのです。民は外側からも、また内側からも押しつぶされ、大きな問題を抱えていました。そしてそんな重たくのしかかっている重荷を前にして、民にできたことは文字どおり何もなかったのです。彼らはアッシリヤなどの敵に対抗することはできませんでした。彼らは自分たちの罪やさばきに対して解決する術を何も持っていませんでした。そのような時に、神様が助けをもたらされるのです。人の手にはどうにもならないそんな重荷のくびきを砕かれる日がやって来るというのです。

どんなふうに砕かれるのか、４節をよく見てください。最後の方に「**ミデヤンの日になされたように**」と書かれていました。さっと読んでいたら、そんなに大きな問題ではないだろうと、読み飛ばすかもしれません。ミデヤンの日というのはどんな日でした？この詳細は士師記７章に書かれていますが、簡潔に説明すると、かつてギデオンというひとりの人物が兵を率いてミデヤン人との戦いに挑むことになりました。このミデヤン人の数は非常に多くて、実に１３万５０００人以上の軍勢を有していました。対するギデオンの軍は、たったの３万２０００でした。１３万５０００対３万２０００。この戦いに勝てる可能性は限りなく低いものでした。しかしそんな時に、神様は現れます。そしてギデオンに向かってこんなことを言うのです。士師記７：２－３にこう書いています。「**:2 そのとき、【主】はギデオンに仰せられた。「あなたといっしょにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った』と言って、わたしに向かって誇るといけないから。:3 今、民に聞こえるように告げ、『恐れ、おののく者はみな帰りなさい。ギルアデ山から離れなさい』と言え。」すると、民のうちから二万二千人が帰って行き、一万人が残った。**」と。神様はこのまま戦いに挑んでいって勝利すれば、イスラエルの民たちが自分たちの力や自分たちの策略で勝利したと思い上がってしまう、さらに人数を減らすようにと言われました。３万２０００人いた兵士は１万人になりました１３万５０００対１万。この時点でも勝利の可能性はほぼゼロでした。神様はこれで終わりません。神様は再び現れ、ギデオンに向かってまだ兵が多すぎると言われます。結局ギデオンの元に残った兵士は、３００人になりました。１３万５千対３００。この戦いはだれがどう見ても無謀にしか思えないものでした。でも結果はどうなったか――。その戦いの様子がこんなふうに士師記７：２０－２２に書かれています。「**:20 三隊の者が角笛を吹き鳴らして、つぼを打ち砕き、それから左手にたいまつを堅く握り、右手に吹き鳴らす角笛を堅く握って、「【主】の剣、ギデオンの剣だ」と叫び、:21 それぞれ陣営の周囲の持ち場に着いたので、陣営の者はみな走り出し、大声をあげて逃げた。:22 三百人が角笛を吹き鳴らしている間に、【主】は、陣営の全面にわたって、同士打ちが起こるようにされた。それで陣営はツェレラのほうのベテ・ハシタや、タバテの近くのアベル・メホラの端まで逃げた。**」と。ミデヤンの軍勢を倒すのにギ

デオンの兵士たちがしたことは、「**【主】の剣、ギデオンの剣だ**」と叫ぶことだけ、ただそのことによって３００人のイスラエルの軍が、大軍勢のミデヤンに勝利したのです。まさに圧倒的な勝利でした。

この日が私たちに教えてくれることは、人の目に不可能に思えても、神様には何一つ不可能なことはないということです。最初から最後までだれかほかの助けが必要だったことなど一度もありません。この神様は、人がその状況は絶対にあり得ないと恐れおののくその時に、ご自分の偉大な力をはっきりと示されるのです。この方の力に勝るものはありません。決して人の手に負えない、どんなに力ある敵であろうと、重く重くのしかかっている重荷、くびきであろうと、たとえ巨大な罪の問題であろうと、この神様の前に手に負えない問題はありません。全知全能の偉大な神様は、そのすべてに対して簡単に圧倒的な勝利を収められます。そのすべてを粉々に砕いて自由をもたらされるのです。

３．ひとりのみどりごが与えられる　６－７節

そのすばらしい勝利は、どのようにして成し遂げられるのでしょう。人には到底どうすることもできないような罪やさばきの問題をどのようにして神様は解決されるのでしょう。それはひとりのみどりごを通してでした。それが最後三つ目の約束です。神様の与える約束の三つ目は、ひとりのみどりごが与えられるということです。残されたみことば６－７節にこんなふうに続いています。「**:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。**」と。なぜ神様はひとりの赤ん坊をなぜ罪や死という最大の敵を滅ぼすのに、最初から輝かしい王冠と衣をまとった王様、天の軍勢を引き連れただれが見ても圧倒的な王様を送らなかったのでしょう。なぜ代わりに小さく、か弱く、親の助けを必要とするようなひとりのみどりごを与えることを選ばれたのでしょう。それは、神様がご自分の持っておられる力、ご自分の持っておられる偉大さというものを示すためでした。私たちの目にどれほど巨大で手に負えない問題に映る罪や悪でさえも、神様の前にはいっさい何の問題もないことを明らかにするためでした。ただしこれは、来られるそのみどりごという赤ちゃん自体が侮られて良い、些細な存在だということではありません。その逆、ひとりの男の子として生まれる方こそ心からほめたたえられるべきお方、約束の救い主でした。なぜわかるかと言うと、６節の最後に、そのみどりごを特徴づける四つ名前が出てきます。

１）不思議な助言者

一つ目に使われていたのは、「**不思議な助言者**」でした。この表現は二つのことばでできています。一つは「すばらしい」、「並み外れた」ということばと、そしてもう一つ「知恵にあふれた良い助言を与える」ということばが組み合わさって、このことばはできています。この当時、優れた王様のまわりには、政策であったり、困った状態に置かれた時に必要なアドバイスを与える助言者や義官と呼ばれる人たちがいました。でもそんな助言者のだれと比べたとしても、生まれてくるこのみどりごの知恵にまさる者はいませんでした。この方こそ並み外れた知識にあふれ、ほかのどんな技官にもできないような驚くべき助言を与えることができるお方なのだと言うのです。

この世の中は、答えを探し求めてさまよっている人たちであふれています。仕事や子育てに関して、家族や友人といった人間関係に関して、また何よりも自分の人生の目標や自分の人生の意義に関して、自分自身を納得させることのできる答えを、どうにかして手にしたいと探し回っています。そうやって人々が答えを探し回っているからこそ、そのためにいろいろな本が出版されました。ネットを見てもいろいろな記事が書かれています。その道の専門家と呼ばれるような人たちもたくさんいます。でもどこを探したとしても、本当の意味での解決策はありません。なぜか――。それは本当の解決策を、私たちに必要な本当の知恵を、知識を唯一与えられる方を拒んでいるからです。何にもまさる知恵を与えることができる方、何にもまさるアドバイスを与えることができる方、それは不思議な助言者として生まれたイエ

ス・キリストだけです。この方はすべてのことをご存じであり、知らないことも、わからないこともない、そのようなものが一つもない、まことの神様でした。コロサイ２：３にも「**このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。**」と書いています。キリストのうちに、すべての知恵と知識というものがありました。キリストには知らないものがないということです。だからこそ私たちがこの不思議な助言者のもとにへりくだっていくその時、私たちはそこにいつも必要な知恵を見いだすことができるということです。日々の生活の中において、子育てに困ったとしても、人間関係に困ったとしても、そして自分の人生の意義に関して困ったとしても、どんな疑問を抱いたとしても、私たちはこのキリストのうちにその答えを見出すことができるということです。

２）力ある神

二つ目に出てきた名前は、「**力ある神**」でした。ひとりのみどりごとしてこの世に生まれたお方は、確かに飼い葉おけに寝かされた小さな存在ではありました。でも同時に、この方は初めから変わらない力ある神様でした。イエス様こそこの世界を創造し、支えておられる主権者なる神様だったのです。そしてそれゆえに、この方は神様にしかできないようなことを地上においてなされ続けていたのです。たとえばイエス様が弟子たちと一緒に船に乗って湖を渡っていた時、彼らはひどい嵐に遭いました。その嵐はあまりにも強大で、熟練の漁師たちでさえも手に負えず恐れで叫んでいました。「主よ、助けてください。私たち、溺れそうです」と。そんな荒波の中、イエス様は言われていました。マタイ８：２６「**……「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。」それから、起き上がって、風と湖をしかりつけられると、大なぎになった。**」と。百戦錬磨の漁師たちにも手に負えないような嵐を静めるのにイエス様に必要だったのはただことばだけでした。これ以外の場面でも同じです。片手のなえた人がイエス様のもとに来た時、イエス様がなされたことは「**手を伸ばしなさい**」（マタイ１２：１０）、そうやって命じることだけでした。そうすればその人は癒されました。病気で死んで４日も経っていたラザロの墓のところに来られた時、イエス様は「**ラザロよ、出て来なさい**」（ヨハネ１１：４３）と叫びました。そうするとそのことばによって彼は死からよみがえって出て来ました。またある時には、ご自分のもとに連れて来られたその人の罪を、イエス様は「あなたの罪は赦されました」（マルコ２：５）と宣言されていました。

この光景を見ていた律法学者たちは憤慨して呟くのです。「**この人は、……神を冒涜している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。**」（２０１７年版マルコ２：７）と。確かにそのとおりでした。神様にしか罪を赦す権威はなかったのです。でもそんな非難に対してイエス様自身がこう答えました。マルコ２：１０に「**人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。**」と。私は「**力ある神**」だと、イエス様は言われました。人の子としてこの地上に来られたみどりごは圧倒的な力を持ち、人の罪を赦す権威を持っていた神様でした。私たちがこの力ある神様のもとにへりくだっていくその時、私たちはこの方にあって、日々の歩みに必要な、十分な力を、助けを得ることができます。そして何よりも私たちはこのイエス・キリストにあって、罪の赦しを見いだし続けることができるのです。

３）永遠の父

「**永遠の父**」という三つ目の名前が出てきました。これを読んで絶対勘違いしないでください。ここでみどりごとして生まれたイエス様が、「**永遠の父**」と呼ばれているのは、イエス様が父なる神様と同じだという話ではありません。聖書が教えている神様は、父なる神様と子なる神様、聖霊なる神様から成り立っている三位一体のただひとりの唯一まことの神様です。ではここでイエス様が「**永遠の父**」というのは、何を意味しているのでしょう。この当時、国を支配していた王様は自分たちのことを指して、自分の国の民を守って、導く責任を負った父だと表現することがありました。家庭においても同じです。父と子の関係で、父親は子どものことを愛をもって養い、教え、戒め、正しい方向へと導いていくという務めを担っているのです。これと同じように、イエス様は「**永遠の父**」でした。イエス様はご自分を信じ受け入れ、

その後に従っていく者たちにとって、どんな時も愛を注いでくれる父親のような存在なのだということです。残念ながらこの世の中には間違った例があふれています。自分はいっさい何もせずに、子どもたちにすべてをさせるようなひどい父親もいます。でも「**永遠の父**」であるイエス様は全くそんなお方ではありません。この方は自ら進んで罪人に仕え、ご自分を裏切り、見捨てて逃げていくような弟子たちの足をも洗い、そして何よりも十字架にかかってご自分のいのちさえ捨てられました。ご自分を信じるすべての罪人の罪をその身に背負って、神様の燃える御怒りを代わりに受けて苦しみ、尊い犠牲を払ってご自分の大きな愛を示してくださったのです。この救いを覚えるだけでも喜びでしょう。

でもさらにすごいのは、イエス様は単に「父」とは言われていませんでした。その名前は、「**永遠の父**」、つまりこのひとり子として生まれたお方は、たまにではありません。永遠に私たちとともにいてくださると言うのです。昔も今もまたこの先も私たちのことを守り、導き、養い、愛してくださるそんな救い主が、父のように私たちとともに一緒に歩んでくださるというのです。それが私たちに与えられるみどりごのすばらしい特徴でした。

４）平和の君

そして最後にもう一つだけ四つ目の名前は、「**平和の君**」です。私たちがまわりを見渡してみれば、この世は悲しみや痛みであふれているということにすぐに気づきます。テレビやネットでニュースを見れば、悲しい、いたたまれないようなことがずっと起こっています。絶え間ない争いは、何も遠く離れた国と国の間で起こっているだけではありません。私たちの間でも身近な人との間で、そのような争いは存在しています。私たちのまわりに争いがあるだけでもありません。私たち自身の心の内側にも争いや戦いというものは絶えずあります。いろいろなものに不安を覚え、恐れを抱き、苛立ちや不満を抱えることもあれば、いつまでも満たされない思いで苦しみや失意を覚えることもあります。人々は探しているのです。いったいどこに自分の心を満たしてくれる平安があるのか、いったいどこに平和を見いだすことができるのかと。そうやって人々は探し求め続けているのです。それが現実です。でもその問いに対する答えも神様が用意してくれていました。

その答えは、今から約２０００年前、ひとりのみどりごとして来られた救い主にあって見いだされるのです。「**平和の君**」として生まれたイエス様は、本当の平和を、本当の平安というものをもたらすことのできた約束の救い主でした。この方の誕生に際して、天使たちも喜びにあふれて賛美していました。どんなことを賛美していたかというと、ルカ２：１４に書いています。「**「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」**」と。このことばのとおりに、イエス様は争いを静め、平和というものをもたらされました。神様との関係を壊していた最大の敵、罪と死の力に対してあの十字架の上でご自分の血を流し、そして神様との間に和解というものを成し遂げてくださいました。罪によって敵となっていた御怒りとさばきだけがふさわしかったそんな私たちと神様との間に、ご自身の犠牲を払うことを通して平和をもたらしてくれました。そのすばらしい真理をみことばは繰り返し述べています。ローマ５：１にこう書いていました。「**ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。**」と。エペソ２：１４でもこう言われています。「**キリストこそ私たちの平和であり**」と。来られたひとりのみどりごは、本当の平和というものをもたらしてくれる「**平和の君**」でした。

自分自身の心に尋ねてみてください。今、あなたはそんなキリストのもたらしてくれる平和というものを持っているでしょうか。神様との間に平和を持っているでしょうか。もしまだこのイエス様を自分の救い主、主として信じ受けれていない人がいるのであれば、どうかよく知っていてください。今、その状態にあってもあなた自身は何も感じていないかもしれません。生まれながらに罪によって盲目になっているあなたは、今の状況に関して何も深刻に思わないかもしれません。でも聖書は明白に教えています。罪人として、神様に逆らい続けて生きるあなたは、今も罪に怒りを燃やす神様の御怒りを自分の上に

積み上げているということです。あなたは今もこの世界を造った神様と敵対関係にあるということです。そしていつかそんなあなたは聖い神様の前に立って、すべての罪がさばかれる時がやって来ます。決して軽く見てはいけません。このお方は正しい審判者、日々怒る神です。ですからどうか自分の罪を軽く扱わないでください。まだ救いが用意されている今、自分の罪を心から悔い改めて、この救い主を信じ、受け入れてください。きょう、本当の平和というものを自分のこととして知ってください。

　そしてその平和というものを自分のこととして知ったのであれば、私たちはいつも安心していることができます。イエス様を知ったからといって困難や試練がなくなるわけではありません。いやむしろイエス様とともに歩んでいくその歩みにこそ、困難や試練は増し加わりもするでしょう。そしてそのようなものが確かに私たちの心に悲しみや失意、痛みをもたらすこともあります。それでも私たちはこの「**平和の君**」にあって、どんな時でも喜んでいられる理由を見いだすことができます。思い出し続けることです。かつて敵であった神様を、私たちは今キリストにあって自分の父、「アバ、父」と呼ぶことができる者に変えられました。それだけではありません。イエス様が平和を成し遂げてくださったから、和解を成し遂げてくださったから、不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君であるそのイエス様と、今だけではない、いつまでもともに歩んで行くことができます。自分とともにいてくださるそのお方は、か弱い存在ではありません。イエス様は不安や恐れを心に抱えていた弟子たちにこんな約束をも与えたのです。ヨハネ１６：３３「**わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。**」」と。

　ひとりのみどりごとして来られたお方は、確かに罪の力に勝利されました。死の力に勝利されました。サタンの力に勝利されました。それが勝利者である私たちの救い主、約束の救世主です。そのお方は一度来られました。一度天に帰られました。でもいつの日か再びこの地上に王として帰って来られ、そして約束されていたとおりに悪を滅ぼし、この地上のすべてに平和をもたらす日がやって来ます。その日のすばらしさを私たちは感謝することでしょう。そして覚えていてください。その日は今も刻一刻と近づいているということです。ひとりのみどりごは偉大なお方です。そんな偉大なお方を心からほめたたえながら、自分のものとするだけでなく、この方を宣べ伝えながら、感謝する者としてこの一週間もともに歩んでいきましょう。